

るいは弟子達が実際に試験機を回し続けて得たデータを基に、疲労現象を解明し、設計への応用を考究するという一貫した姿勢が貫かれている。信念を持って事を処すことがいかに大切かという大事な警句が潜んでいる。

この頑固さは先生の論文指導にも表れている。実験データに基づいて四苦八苦して論文原稿を作成し、これが完全だと原稿用紙の升目を埋めて、先生に持参すると、完膚無きまでに訂正の朱が入る。書き直しである。ワープロなどのない時代、原稿はすべて手書きであり、必死の思いで再編・持参すると、ま

た朱が入る。再び書き直し、再度持参、またまた書き直し。数回この操作が続く。先生のその時の気分で訂正される部分も皆無ではないが、大部分は、一字も疎かにしないという厳しい先生のご薫陶であった。当時は随分恨めしく思ったこともあるが、振り返ってみると結構自分の勉強になっていることに気付き、今では大変に感謝している。これが本当の修行というものであろう。

若い時代の修業は後の成功への秘訣。若い諸君には、何事にも信念を持って果敢にチャレンジし、素晴らしい人生を勝ち取って欲しいものと願っている。

~~~~~

## 本とエッセイとホームページ

経済学部助手

藤原 敦 志

夜、仕事を終えて家に帰り、夕食をすませると、よく一人で手持ちぶさたになる。そういうときだいたいTVをつけるか、音楽をかける。たまに、まだ思考をまとめる力が残っていれば、読みかけの本を読む。短いエッセイのときもあれば、長編小説のときもある。しばしの間、忘れていた別の世界に自分をトリップさせて、その後、現実の自分と少し距離を置いて向かい合えることで、「心のとげ」みたいなものがとれてほっとする。

フィクションでもノンフィクションでも、分厚い本になると読む前にちょっとした思い入れがある。長編は出だしが退屈なケースが多いから、「実はこの本は、はずれじゃないか？」と途中でよく挫折しそうになる。そんなとき、作者に対して「この人は人を裏切るような人じゃない。おもしろくないのは、僕の読み方が甘いんだ。」という確信が持てれば、何とか峠を越えられるし、後半にしばしば潜んでいる「当たり」の部分を見逃さないですむ。

ときどき新聞や雑誌に、作家が日常的な出来事に関するエッセイを載せている。小説というものが作家が作り出したもう一つの日常の世界だとすれば、そういうエッセイは、その作家自身の自分の小説に対する、コメントというか言い訳みたいなものに当たると思う。僕はまずそういうエッセイを読んで、

「多分おもしろい世界を作ってるんじゃないかなー。」と期待して、その人の小説を手にとってみる。そしてその作品がおもしろいと、またその人のエッセイを読んで、小説の裏に隠されていた別のメッセージを想像してみる。そんな相乗効果がうまく働くと、その作家とある期間ずっと「会話」することになり、僕の日常生活を陰で支えてくれる。

本を出版するという事は、限られた人にしか許されないけど、最近はインターネット上で自分のホームページを開いて、そこに自分の文章を載せることができるようになった。去年、赴任してきたばかりの僕は、大学であまり失うものも無かったので、2週間に一度、自分のエッセイをホームページに載せるという実験を試してみた。高松に来て感じたことや、経済学者としての意気込みなどを、できるだけさっぱりとした文章で書いてみた。日記とは違うから、ふだんぼんやりと考えてることを、きちんと人に伝えられる形にするのに苦労した。あと嘘はつきたくなかったから、エッセイの内容と自分の行動を比較しつつ、どっちかを絶えず修正しないといけないプレッシャーが、ちょっときつかった。でも半年ほどそういうことを続けた後、何となく香川大学になじめたような気分になった。